『信愛紀要』別刷
（和歌山信愛女子短期大学）
2023年　第64号

日本におけるグレゴリオ聖歌の変遷についての考察

仲　谷　徹　子

日本におけるグレゴリオ聖歌の変遷についての考察

A Study on the Transition of Latin Chant in Japan

仲谷徹子

Tetsuko Nakatani

要　約

日本にフランシスコ・ザビエルがキリスト教を伝来した史実は有名であるが、ラテン語の聖歌や西洋音楽が同時に伝来したことはあまり知られていない。そこで、どのような聖歌や音楽が伝えられ、その後キリスト教弾圧期とキリスト教の布教が許されて後、歌い継がれてきたのかを調べてみる事により、聖歌の持つ本質が理解できると考えられる。また現在のカトリック教会やカトリック幼稚園で歌われる聖歌や讃美歌の本質にも辿り着けると考察する。

はじめに

現在、私たちの耳に入ってくる音楽は邦楽と言われる日本古来の音楽は少なく、鎖国が終わった明治時代以降に日本に取り入れられた西洋音楽が多く受け入れられている。その音楽的な響きや楽典の要素はヨーロッパで長年に亘り創り上げられてきた音楽である。明治以降に作曲された文部省唱歌などもドイツなどに留学して学んだ知識や、日本における西洋音楽教師により学んだ作法で、日本人が受け入れやすい旋律と歌詞で作られた楽曲である。では、西洋音楽史の始まりは、どのような音楽であったかというと、音楽史年表の一番始めに取り上げられるのがラテン語聖歌である。そのキリスト教のラテン語で書かれた聖歌がポルトガル宣教師によって日本人に届けられたのか、又どのような旋律であったのか、残された資料は何であるのかを知る事で、現代でも歌い継がれている聖歌や幼稚園で歌われるさんび歌の祈りの部分につながっていくと考える。

1.　ラテン語聖歌について

ラテン語聖歌とは、カトリック教会で歌われて来たグレゴリオ聖歌のことである。この聖歌は、三千年の歴史を持っていると言われている。なぜならば、旧約聖書の時代にさかのぼると考えられるキリスト教の礼拝の歌、賛美の歌、祈願の歌は、旧約の礼拝と賛美と祈願の歌の継続である。そして、キリスト教がギリシャ人の世界、ローマ人の世界に広まるにつれてそれぞれのメロディを取り入れて豊かになっていった。今日まで歌われている聖歌はこのような古代の音楽の様々な要素を統合したものであると考えられる。

この聖歌はローマ・カトリック教会の伝統的な単声典礼聖歌のことである。

1―1　典礼における聖歌と音楽

1963 年第二バチカン公会議第 112 条「全教会の音楽の伝統は、他の諸芸術の表現にまさって、計り知れない価値を持つ宝庫である。それは特に聖歌がことばと結ばれて荘厳な典礼の一部をなし、必要欠くことのできない部分をなしている。教会音楽は祈りをより美しく表現し、一致強調を促し、聖なる儀式をより荘厳なものとして豊かにすることにより、典礼行為と固く結ばれている。したがって、聖なるものである。」第114条「教会音楽の宝は細心の注意を持って保存、育成されなければならない。」第116条「教会はグレゴリオ聖歌をローマ典礼の固有な歌として認める。したがってこれは、典礼行為において、同等のものの間で首位を占めるべきである。」とある。典礼は朗読・歌・祈りの三つの要素を持っているが、典礼における朗読とは聖書の朗読、歌の最も大きな部分は詩編を歌詞にしている。この歌詞は旧約聖書の百五十編からなっている。この中の多くはダビデ王が書いたものと言われている。ミ

サ典礼においては、この詩編詠唱を中心に色々な要素を取り入れて、聖書の言葉や歴史的な物語などから取った文を詩編の前後に歌うという形が出来て来た。いずれにしても、詩編詠唱が中心になっている。それ故、三千年の前からの祈りが今もなお典礼の中に率い次いで行われているといえる。

１－２ 聖歌の音楽

ラテン語聖歌は基本的に八つの調で書かれている。その他に巡礼調といのもあるが、これは特に晩課の際に詩編114を歌うために特別に作られた調である。内容はユダヤ人がエジプトを脱出した時の神の保護を感謝して歌っている。八つの調は基音と属音の関係によって成り立っている。基音とはその曲が必ず終止するという音のことである。基音はレ、ミ、ファ、ソの四つが使われる。それを中心にして音域ができている 基音の上に5度と4度が重なって行き、その下に4度を加える音階が出来ている。それぞれの正格調と変格調の二種類を持っている。つまり、レ、ミ、ファ、ソの四つの基音のそれぞれについて、属音の違う二種類ずつの調が存在する。その他ラ、シ、ドを基音として転移調も存在する。転調は頻繁に行われる。八つの正常調と転移調は祈りの意味、祈りの精神、心と一貫した理論の上で、作られている。音階は全音階のみが使われる。ただしシb（変シ）だけは使われる。リズムは2拍あるいは、3拍の合成拍子を特色としている。記譜法はネウマと呼ばれる手書きの写本に記され、現在も記号の持つ知識と音楽的意味が研究されている。

1—3　ミサと聖務日課

典礼の祈りはミサと聖務日課によって行われる。
ミサとはキリストが最後の晩餐で弟子たちに制定した教会で行われる典礼（祭儀）のことである。

ミサでは通常式文といわれる祈りは次の５つである。キリエ（いつくしみの賛歌）グローリア（栄光の賛歌）クレド（信仰宣言）サンクトゥス（感謝の賛歌）アニュス・デイ（平和の賛歌）となる。通常式文は決まった祈りの言葉で出来ており、ミサの中で唱えられるか歌われる不可欠な部分である。固有式文は、 入祭唱・昇階唱、アレルヤ唱（詠唱）、奉納唱、聖体拝領唱となる。固有式文はその日のミサにより唱えられたり歌ったりする定型文とは違った祈りのことである。

〈聖務日課〉一日のうちで一定の時刻に祈りを唱える礼拝の一形式のことである。聖務日課では、朝課、賛課、一時課、三時課、六時課、九時課、晩課、終課の祈りが行われる。この中で、詩編や賛歌、カンティクム、聖母マリアに対する交唱が歌われる。このように、ローマ・カトリック教会では、祈りと音楽、特に詩編を中心とした聖歌が礼拝の必要不可欠なものとして位置づけられている。それは紀元前ヨーロッパ各地の修道院で歌い継がれ、教皇グレゴリウスⅠ世（在位590~604）により集大成されたヨーロッパ各地に広められた聖歌である。
聖歌の旋律がどのような起源を持ち、作られたかは、今なお沢山の研究や議論がなされている。

2.　日本におけるキリスト教の伝来と弾圧

2-1 キリスト教伝来期

1549 年に聖フランシスコ・ザビエルがスペインから鹿児島に来日し、日本に初めてキリスト教とヨーロッパ文化が伝えられた。権力者であった織田信長は新しい宗教に理解を示し、日本国内での布教を認めた。それと同時に京都や滋賀県に「セミナリオ」と言われるキリスト教の神学校を作ることを許可し、西洋諸国に「天正遣欧使節団」を遣わすなどした。その後、外国人宣教師の活動によって多くの日本人が洗礼を受け、それ以降西日本の各地、九州の天草、島原、長崎、平戸、生月島、度島などでラテン語の聖歌が歌われたことが各種の記録に残されている。その当時のヨーロッパではルネッサンスと呼ばれる時代で、ポリフォニー音楽（多声）や宮廷向けの器楽曲などが演奏されていた。一方、日本にキリスト教が伝来した時代は室町末期から安土・桃山時代であった。その当時の音楽は、平曲、今様、白拍子早歌、曲部、浄瑠璃、田楽能、猿楽能、筑紫箏などが主流であった。特に能・狂言は室町時代末期から大流行し、貴族・支配階級・民衆に受け入れられていた。そのような音楽的環境の中、日本人の西洋音楽に対する反応については、皆川達夫著『洋楽渡来考/栄光と挫折』によると外国人宣教師によるラテン語聖歌の歌ミサを聴き、大いに喜びたりと書かれている。また、単旋律で歌われるラテン語の聖歌の他、多声聖歌、クラヴォやチャルメラ、ヴィオラ・ダルコ、オルガンなどの器楽曲も演奏されたとある。

2-2 豊臣秀吉による弾圧期

1587 年に豊臣秀吉は、九州の大名と民衆によるキリスト教信者の増加を懸念し、伴天連追放令、次に禁教令(1596 年)を発令しキリスト教を弾圧した。その後も厳しい弾圧が続き、キリシタン音楽の楽譜、楽器類も一切何も残されていない。

2-3『サカラメンタ提要』と隠れキリシタンのオラショ

厳しい弾圧下、ポルトガル語・ローマ字表記で書かれた日本語の典礼書とラテン語聖歌の楽譜『サカラメンタ提要』というミサの典礼書がある。『サカラメンタ提要』は、日本で印刷された初めての印刷物であるが、日本には現存せず外国からの逆輸入という形で存在する。典礼式文は頭文字や典礼規定文は赤、式文は黒で区別されている。楽譜は五線楽譜が赤、ネウマ音符と歌詞が黒で印刷されている。楽曲はすべて単旋律のラテン語聖歌で、19曲のうち13曲までが死者のための聖歌となっている。

かくれキリシタンは、徳川幕府の厳しい弾圧の元、表面上は仏教徒を装いながらキリスト教の信仰を守り続けてきた人たちのことである。しかし、禁教下に司祭はほとんど殉教して教義を指導する者がいなくなり、次第に民族的な信仰に変容していった。かくれキリシタンの祈りは「オラショ」と呼ばれる。ラテン語、あるいはポルトガル語から来ているといわれている。そのレパートリー、言葉、節回しは集落ごとに違いが見られる。厳しい弾圧を恐れてすべて暗唱され、神を賛美するという本来の姿は失われ、ただ唱えることを目的としている。ほんの一部分に節をつけて歌われる「歌オラショ」が存在する。著しく変容しているが、400 年前のラテン語聖歌に辿ることが可能である。厳しい弾圧の中、意味がまったく理解できないラテン語聖歌を口伝で歌い継いでいる。前出の皆川達夫氏はヨーロッパ各地の図書館を隈なく探し、生月島のオラショの原曲をスペインの図書館で見つけている。これは、スペインのある地域だけで歌われていたローカルな聖歌であった。

3. 明治期の典礼聖歌

鎖国体制の崩壊後、安政 5 カ国条約(1858 年)の締結により、ようやく日本在住の外国人に対して信仰の自由が認められた。開国後、初めて来日したのは極東地区の宣教を教皇庁から委ねられたパリ外国宣教会のジラール神父であった。それは、外国人のためにのみの宣教活動であった。1862 年に横浜にイエズスの聖心天主堂、1865 年に長崎の大浦に日本二十六聖人天主堂が建てられた。その大浦天主堂でフランス人のプチジャン神父が、16 世紀のキリシタンを発見している。しかし、信仰の自由が与えられていたのは外国人のみで、日本人に対するキリスト教禁共令は続いていた。1873 年から制限つきで宣教が認められるようになり、積極的に音楽が取り入れられ、聖歌集も出版されるようになった。開国の当初から明治後半に至るまで、宣教を担っていたパリ外国宣教会の司祭は、1873 年に 19 人、同年新たに 11 人が来日している。同宣教会は、日本宣教補助のためにフランスの修道会のメンバーに派遣を要請し、1872 年にサン・モール修道会(幼きイエズス会)から 5 人、1877 年にショファイユの幼きイエズス修道会から 4 人、1878 年にはシャトル聖パウロ修道会から3人、1887 年にはマリア会から 2 人と相次いで来日している。プロテスタント諸派がイギリス、アメリカの英語圏一色であったのに対し、カトリック教会はフランス一色であった。そのため、当時フランスで歌われていたラテン語およびフランス語の聖歌の影響を色濃く受けている。

3-1 日本語聖歌

1867 年、日本のカトリック教会は北緯代牧区と南緯代牧区の 2 つに分けられ、1878 年にはそれぞれの地区で聖歌集が編集される。キリシタン禁教制高札のわずか 5 年後のことである。1863 年に派遣されたベルナード・プチジャン神父は長崎地方のキリシタンの伝統的な言葉(キリシタン用語)を引き続き残し、『きりしたんのうたひ』を出版している。この聖歌集は大部分平仮名の可動式活字で印刷され、漢字は少ない。歌詞のみの聖歌集である。E・ヘンゼラー氏所蔵の 1880 年手書き歌詞聖歌集と『きりしたんのうたひ』とを比較すると当時フランスで用いられていた同じタイトルの聖歌を見出すことができる。タイトルの横に、ラ、ラ、ソ、ラ、ファというように音名が書き込まれている。歌詞の内容はフランス語を日本語に訳したもの、ラテン語聖歌の日本語訳のものとに分けられる。歌詞には「○」や「△」などの記号が付され、歌い方が示されている。一方北緯以代牧地区でも、1878 年頃、ルマレシャル神父によって聖歌集の編纂が行われている。この聖歌集は手書きの版であり、1878 年頃、ルマレシャル神父によって聖歌集の編

纂が行われている。この聖歌集は手書きの版であり、いずれもラテン語の聖歌と日本語聖歌を含んでいる。しかし、原本は存在しない。全部で13冊の聖歌集を確認することが出来る。

3-2 明治から現在まで

昭和 8 年にカトリック教会は、全国統一の『公教聖歌集』を出版した。しかし時が過ぎるにつれ、多くの問題点が指摘され、昭和 31 年に全国の教会・学校・修道会にアンケート調査を行い『公共聖歌集』の中からよく歌われる曲を残し、聖歌に関する事情や希望についての結果を受けて、26 曲の明治期の聖歌が残され、新たに 60 数曲を加え『カトリック聖歌集』(1961 年)が編纂された。昭和35年、前出の第二バチカン公会議において、それまでラテン語で行われていたミサを母国語で行うという改革がなされた。これを受けてカトリック信者であった高田三郎氏によってほとんどが作曲された『典礼聖歌集』(1980 年)がある。これはミサ聖祭をすべてまかなう内容になっている。その後、ミサでの言葉が新しくなり(2022年)通常式文の曲が作曲されている。

おわりに

現在、カトリック教会で最もよく歌われている『典礼聖歌』を聴いていると、グレゴリオ聖歌の精神を感じずにはいられない。高田三郎著「典礼聖歌を作曲して」(オリエンス宗教研究所)においてグレゴリオ聖歌の自由リズムを日本語に取り入れ、日本の音階によって作曲されたものであることが示されている。このグレゴリオ聖歌は、ヨーロッパや旧約聖書の時代からの旋律を取り入れながら歌い継がれてきた教会の宝である。カトリック教会においてモーツアルトやベートーヴェンなど主たる音楽家もその精神を守り、数多くの宗教曲を作曲している。日本では、プチジャン神父がキリシタンの言葉を残した聖歌集を取り入れ、キリシタンの人々が聖歌に込めた祈りと、ヨーロッパで守り歌い継がれている聖歌の精神が一つにつながっているようにこの研究から考察出来たと考えられる。今後は、教会のみならず学校・幼児教育においての聖歌の普及及び、継承についても考察していきたいと考える。

引用・参考文献

岳野　慶(1996)『グレゴリオ聖歌のこころ　その霊性の探求』創風社
野村良雄(1967)『世界宗教音楽史』 春秋社
水嶋良雄(1970)『グレゴリオ聖歌』 音楽之友社
E・カルディー著水嶋良雄訳(1979)グレゴリオ聖歌セミオロジー『古楽譜記号解釈』 音楽之友社
水嶋良雄(1973)『グレゴリアン音楽古文書学』 エリザベト音楽大学
カール・バリシュ、ジョン・オール共著　服部幸三訳(1958)『音楽史』－グレゴリオ聖歌からバッハまで－音楽之友社
『音楽辞典』(1991 第 1 版改訂版) 音楽之友社
『カトリック大辞典』(2009) 研究社
皆川達夫(2004)『洋楽渡来考』－キリシタン音楽の栄光と挫折－　日本キリスト教団
尾原　悟(2005)『きりしたんのおらしょ』 教文館
皆川達夫監修(2006)『洋楽渡来考CD＆DVD版解説書』 日本伝統文化振興財団
吉川英史(1967)『日本音楽の歴史』 創元社
横田庄一郎(2000)『キリシタンと西洋音楽』 朔北社
ハンス・ヘルヴェク著(1967)『カトリック教育協議会　第二バチカン公会議と日本におけるカトリック教育』 カトリック教育協議会
E・ヘゼラー、安足磨由美(2008)『明治期カトリック聖歌集』 教文館
佐々木　悠(2021)『言葉をうたう　グレゴリオ聖歌セミオロジーとリズム解釈』 教文館
手代木俊一監修(1998)『明治期讃美歌・聖歌集成』 大空社
『カトリック聖歌集』(1979 第三版)　光明社
『典礼聖歌集』(1980 第三版) あかし書房
『聖歌伴奏譜』(1950) 光明社
南山大学カトリック文庫通信No, 3 1995「『カトリック文庫』資料紹介」栗山義久